

《論文》

## 岡本かの子「鯨」・「川」——母から〈母〉へ

松本 佳純 MATSUMOTO, Kasumi

はじめに

岡本かの子（一八八九―一九三九）は小説家でもあるが、歌人、仏教研究者としても活躍した。そのため小説作品の研究の際にも、仏教的思想が描かれていることが指摘され、また小説に挿入された短歌が研究の中心に置かれてきた。仏教研究者や歌人、あるいは芸術家・岡本太郎の母としてのかの子という、バイアスのかかった見方でかの子の小説は研究されてきたのである。そのような面を取り除いて作品を考察することでは、これまで見えにくかったかの子の小説の仕組みが明らかにできるのではないだろうか。そのためのキーワードとして母性を挙げる。

母性に関しては先行研究でも繰り返し論じられており、かの子文学の主要なテーマである。これまでの研究では、仏教との関連や太郎との母子関係のなかでの母性というように、かの子が描いた小説の研究をした上での母性ばかりが注目されてきた。しかしながらかの子の文学での母性とは単に実の母が実の子に抱く愛情とは一線を画する。本稿では作者

の経歴や家族関係、母子関係より作品の本文に重きを置き、何が描かれているのかという視点から「母性」をキーワードに考察する。

血縁上の母子関係以外の人間関係で母親のような愛情を注ぐ存在は「ウール・ムッター（根の母）」（岡本かの子「生々流転」）、またそのような愛情は大母性などと呼ばれ、作品からそれらを見出す論も見られる。一方で、本稿で定義する〈母〉は複数の作品を比較することにより母として機能していることが分かる人物である。血のつながりはないものの中で母として機能している人物を〈母〉と定義し、その〈母〉が〈擬似的なものも含めて〉関係として子にあたる存在に抱く愛情を〈母性〉と呼んで、一般の母や母性と区別したい。「ウール・ムッター」や大母性という作品の外の概念を用いずとも、辞書的な意味によるところの母とは異なる〈母〉が抽出できるのである。

考察する作品には、一般的な母とは異なる母が端的に描かれていると幾度となく指摘されている「鯨」『文芸』一九三九年一月）を取り上げる。また「鯨」と酷似しているがこれまで「母／母性」を軸とした研

究がされなかった作品「川」(『新女苑』一九三七年五月)との比較考察も試みる。血縁関係上の母と、血のつながりは無いものの母なるものとして描かれる(母)について具体的な本文の検討を行いたい。

### 岡本かの子研究動向

まず、かの子の小説研究の大きな流れを述べておきたい。かの子についての研究論文では、作品や発表年によらず「生命/いのち」「仏教」「母/母性」「川/河」をキーワードとする論が多く見られる。

田中保隆氏<sup>(1)</sup>から作者の思想より作品本文に重きを置く研究がなされはじめたが、それまでは仏教や大乘哲学などかの子の思想に重点を置いた作品読解が中心である。全体としては作品本文に基づく研究が少なく、作中人物がかの子自身であるという立場をとるものが多い。かの子自身が川端康成宛書簡で

あなたのお作を読みますと、素直に上品にそして神経が靱くなつて行くのを感じます。そして何処か冥くてほの明るく感覚がひきしまつて行くのを知ります。うらやましいと思います。だけれど自分にはどうしても哲学や思索がつきまとうのだからそれはそれとして仕方がない、文学がそれに邪魔されるのを恐れて居ないで文学で征服してしまえば好かるうなんという思いつきもしてみましたがいかがでしょう。<sup>(2)</sup>

(傍線は引用者による。以下同。)

と述べているため、そのような研究に意義を見出したものと思われる。かの子の思想や考え方や作中人物の考えや行動が重なることを指摘し

たり、かの子の生い立ちと作中人物の境遇に共通点を見出したりする論もあるが、作中のある人物がかの子自身であることを前提に読む研究もある。

かの子自身が作中に登場しているとすれば、かの子の思想や考え方を研究することが作品の研究にもなる。しかしながらこれらはかの子についての「いのち」とは何か、仏教が著作にどのような影響を与えているかなど、思想を軸とした論であるため、作中人物がかの子自身であるという立場をとらない限り作品の読解としては根拠が抽象的になってしまう。さらに言えば、作中人物がかの子自身であるというのは作中人物とかの子の部分的な共通項を根拠にしている。穿った見方ではあるが、作中人物とかの子では共通しない部分も確かに存在するのである。それにもかかわらずかの子と作中人物を別のものとみる論はほとんど見られない。なお、勝又浩氏<sup>(3)</sup>が作者と作中人物が別のものである旨を指摘するものの、結局混同して論が進められている。

松本智子氏<sup>(4)</sup>はかの子の思想だけでなく自然主義の台頭やフェミニズムの出現など客観的な時代背景を加味した論を展開するが、ここでも仏教とかの子を切り離してはいない。一九八〇年頃までは仏教、また仏教と関連させ「いのち」について述べる論が多い。

このあと「母/母性」をキーワードとする論が増えてくるが、一九九〇年代になると仏教と作品を結びつける論が少なくなり、宮内淳子氏、高良留美子氏、漆田和代氏などによる本文読解中心の研究が増える<sup>(5)</sup>。かの子と作中人物の共通点は言及されるが、一九六〇年代頃に見られる、あたかも作中人物がかの子自身であるのが前提というような論旨のものはない。

本稿では、これまでのようなかの子と作中人物を同一視する研究ではなく、作中の人物は作中の人物として読解を試みる。作中人物がかの子と同一であるという立場をとることで言及されにくかった部分、つまりは現実のかの子と共通しない部分に新たな読みの可能性を見出すことを目的としたい。小説表現を丁寧に分析することで、かの子の文学に何度となく指摘されてきたテーマが、自然と別のかたちで浮かび上がってくるのだ。

### 「鯨」研究動向

では、「鯨」の考察に入る前にこれまでの「鯨」研究で要点とされてきた部分に触れておきたい。湊が旧家の出身である点から、「鯨」には家霊というテーマが描かれているとの指摘がある。

かの子の作品では旧家に生まれた者の特殊性が多く描かれ、それは「家霊」〔新潮〕一九三九年一月のタイトルにもなっている家霊という語で表される。この家霊という語がかの子の造語だと述べる論もある中で、そうではないことを野田直恵氏<sup>8)</sup>は指摘している。しかしながら辞書的な意味、またかの子が読んだであろう家霊に関する文献だけでかの子の文学に著される家霊の定義を述べるのは難しいようだ。また中条省平氏<sup>9)</sup>は湊を「旧家が崩壊する時には異常に感性の繊細な子どもが出てくるという、岡本かの子特有のテーマを脊負った人物」と述べている。本稿で家霊についての詳細な考察は行わないが、この家霊という思想にはかの子自身が旧家の出身であったことも大きく関わっていると考えられてきたことは述べておきたい。

さらには勝又浩氏<sup>8)</sup>が指摘する通り、家霊をキーワードにすることで「家

霊」や「過去世」〔芸芸〕一九三七年七月と「鯨」をグループイングできる。杉森久英氏<sup>9)</sup>は、「鯨」では湊が食を拒絶し「死の豫感」が描かれる一方で「家霊」ではじょうを食べる人々の「生への執着」が描かれていると述べる。また近藤華子氏<sup>10)</sup>は、職業夫人の登場の有無に着目し読みなおすと大きな違いがあると指摘している。このように特に設定の酷似した「家霊」と「鯨」は比較対象にされやすい。それは発表当時の川端康成の

「家霊」と「鯨」とは、一對をなす短篇と言へる。一つは泥鯨屋、一つは鯨屋、共に日本的で妙な食ひもの店を描いてゐる。

という評価<sup>11)</sup>を汲んでいると思われる。言い方を変えると、その評価を脱し得ていないとも言えるだろう。

呉順瑛氏<sup>12)</sup>や近藤華子氏<sup>13)</sup>は、旧家の出である湊ではなくともよに焦点を絞ったことで、作品本文では描写の少ないともよの人物像を浮き彫りにした。

なお一平が、幼少のかの子が偏食であり、母親が工夫して卵を食べさせていたエピソードを明かしたため、湊にはかの子が投影されていると見る向きがある<sup>14)</sup>。湊がかの子と同じく旧家に生まれ、また同じく偏食である幼少期を過ごしたことはこれまでの研究で明らかになっている通りではある。しかしながら本稿では湊を通してかの子の影を見る読み方を脱し、具体的な本文の検討を丁寧に言うことで新たな論点を提示したい。

## 母と〈母〉

ここからは母と〈母〉の差異を具体的な本文の検討から明かにしていきたい。偏食だった湊の、空腹時の様子が次のように描かれている<sup>(15)</sup>。

窪んだ腹に緊く締めつけてある帯の間に両手を無理にさし込み、体は前のめりのまま首だけ仰のいて

「お母さあん」

と呼ぶ。子供の呼んだのは、現在の生みの母のことではなかった。

子供は現在の生みの母は家族じゅうで一番好きである。けれども子供にはまだ他に自分に「お母さん」と呼ばれる女性があつて、どこかに居そうな気がした。自分がいま呼んで、もし「はい」といつてその女性が眼の前に出て来たなら自分はびっくりして気絶して仕舞うに違いないと思う。しかし呼ぶことだけは悲しい楽しさだった。

「お母さあん、お母さあん」

薄紙が風に慄えるような声が続いた。

「はい」

と返事をして現在の生みの母親が出て来た。

傍線部が「鯨」における〈母〉にあたる記述である。このように、ある人物と血のつながりのない、つまり生みの母ではない誰かが母のように描かれる、その母のような人物を本稿では〈母〉と定義する。また〈母〉の抱く愛情は〈母性〉と呼ぶこととする。

なお杉森氏<sup>(16)</sup>は傍線部の実の母ではない「お母さん」、本稿で〈母〉と

呼ぶ存在を「現実の母からその生々しさを取去った抽象的な母性―母一般」「凡ゆる感覚的な要素を持たぬ、瀟灑のやうに縹渺とした母性そのもの」と解釈している。

また外村彰氏<sup>(17)</sup>は湊が母の愛に飢えていたことを指摘した上で、「母の愛に満たされない「切ない感情」を「体一ぱい」に詰まらせ、幻想の母のなかに、本来そうあつて欲しい、濁りのない母の佛を抱いていた」と読む。

湊は母が自身の手で握ってくれた鯨を食べ、次のような反応を示した。

それをひとつ喰べて仕舞うと体を母に抛りつけたいほど、おいしさと、親しさが、ぬくめた香湯のように子供の身うち湧いた。

子供はおいしいと云うのが、きまり悪いので、ただ、にいつと笑つて、母の顔を見上げた。

(中略)

かくて、子供は、鳥賊というものを生れて始めて喰べた。象牙のような滑らかさがあつて、生餅より、よっぽど歯切れがよかった。

子供は鳥賊鯨を喰べていたその冒険のさなか、詰めていた息のようなものを、はっ、として顔の力みを解いた。うまかったことは、笑い顔でしか現わさなかった。

このように、言葉で「おいしい」ことを直接伝えるのではなく、笑顔を見せることで間接的に「おいしい」と伝えようとしている。次に引用する場面からは、これまでは食べることでできなかった魚を食べ、偏食を克服した湊の喜びが窺える。

白く透き通る切片は、咀嚼のために、上品なうま味に衝きくずされ、程よい滋味の圧感に混って、子供の細い咽喉へ通って行った。

「今のは、たしかに、ほんとうの魚に違いない。自分は、魚が喰べられたのだ――」

そう気づくと、子供は、はじめて、生きているものを噛み殺したような征服と新鮮を感じ、あたりを広く見廻したい欲びを感じた。むずむずする両方の脇腹を、同じような欲びで、じっとしていられない手の指で掴み搔いた。

しかしながらやはり、言葉で母にその喜びを伝えようとはしていない。母の手作りの鮪を食べた後で、湊は

子供は、ふと、日頃、内しよで呼んでいるも一人の幻想のなかの母といま目の前に鮪を握っている母とが眼の感覚だけか頭の中でか、一致しかけ一重の姿に紛れている気がした。もつと、びったり、一致して欲しいが、あまり一致したら恐ろしい気がする。

自分が、いつも、誰にも内しよで呼ぶ母はやはり、この母親であったのかしら、それがこんなにも自分においしいものを食べさせて呉れるこの母であったのなら、内密に心を外の母に移していたのが悪かった気がした。

と、母と〈母〉を同一視するような感想を持っている。外村氏<sup>(18)</sup>は、ここでの湊の母は「彼のほんとうに求めていた母親の姿となって彼の眼に映

じていたに違いない」く、「もはや切ない幻影の母なぞ必要ではなくなっているのである。」と述べる。宮内淳子氏<sup>(19)</sup>も「生みの母」と幻の母とが一致したこの瞬間が、子供にとつて至福の時であった。」と述べた。杉森氏<sup>(20)</sup>はこれを「母性一般と現実の母の一致」と述べ、その一致は本来にあり得ることなのか疑問を呈している。ここでの母と〈母〉の同一視については後述する。これまで本文を引用してきた「鮪」の場面に類似する箇所が「川」にも見られる。次節から「川」についても作品本文を見ていきたい。

### 「川」研究動向

「川」の冒頭は

かの女の耳のほとりに川が一筋流れている。まだ嘘をついたことのない白歯のいろのさざ波を立てて、かの女の耳のほとりに一筋の川が流れている。

である。家霊とともに「川／河」もまた、かの子の文学のキーワードの一つとされてきた。かの子が多摩川の近くで生まれ育ち、繰り返し作品で川を描いていることがその理由であろう。作品タイトルに川／河のつくものでは「川」の他にも「河明り」(『中央公論』一九三九年四月)がある。また、女性を川や水にたとえることもある。例えば「落城後の女」

(『日本評論』一九三七年十二月)には

この小説の題をまた「女の河」ともいう。

女の生命の脈絡は摩訶不思議である。地の中の河のように、人知れず流れている。そこに意志ありとも思えない。しかし、卒爾ではない。(前書)

と前書きが記されている。

「川／河」という語は、このように「女の生命の脈絡」というような意味合いでかの子の作品を読解する上ではある種の規範的コードになっており、「川」に言及する数少ない先行研究でもほとんどは冒頭の一部分が引用されるのみだ。かの子文学における特別な含みを持つ語「川／河」の側面を端的に描いた冒頭であることが紹介されるに留まっっている。

かの子の文学における「川／河」の意味は、亀井勝一郎<sup>(21)</sup>が度々述べてきたイメージによって作られていると言っても過言ではないのではなからうか<sup>(22)</sup>。かの子の生立ちや作中の川の描写など複数の観点からかの子と「川／河」について述べられており、後の研究でも「川」の具体的な本文より亀井の述べたイメージが先行している観がある。冒頭の一文が端的にキーワードの「川／河」を表していると考えられ、そのみが引用されやすかったのはそういった理由からだと思われる。

そのような研究史の流れの中で、杉井和子氏<sup>(23)</sup>は冒頭以外にも目を向け、「鯨」との比較考察をしている。「食慾」、「鯨」に共通の生理的嫌悪感も記され<sup>(24)</sup>ていることを指摘するものの、その具体的な本文の検討は割愛されている。次節でその具体的な本文にあたってみることにする。

「川」の登場人物のモデルについて、尾形明子氏<sup>(24)</sup>が次のように述べている。

「かの女」は断るまでもなくかの子自身であり、かの子の結婚の後、川に身投げした青年の話をかの子から聞いたことがあると、作家の若林つやが長谷川時雨から聞いた話として私に語ってくれた。

続けて「「都会の明るい顔をした」青年画家（引用者注…かの女の結婚相手）は岡本一平。」、「その結婚に首をかき上げた兄は大貫昌川。」と指摘しており、かの子の体験が描かれていると述べる。しかしながら本稿ではそのような事実との関係を探る実体的な立場からではなく、他作品との比較を通して作品を再読してみたい。

### 「鯨」と「川」の構造的類似

ここまで「鯨」と「川」についてそれぞれ述べてきたが、〈母〉を軸に読むとこの二作品には描写、さらに構造の類似が見られる。「鯨」の湊とその母の関係は、「川」のかの女と直助の関係に対応しているのである。次の「川」の引用は、「鯨」で湊の母が息子の食への拒絶を取り払おうとする場面に非常によく似ている。直助が「旨い川魚」を探す場面である。

魚籠を提げて、川上、川下へ跨がり、川魚を買出しに行く直助の姿が見られた。川上の桜や、川下の青葉の消息が彼の口から土産になって報じられた。彼は一通りそれらの報告をして、生魚の籠を主人達に見せてから女中達のいる広い厨に行き、買い出して来た魚を、自分で生竹の魚刺を削って、つけ焼にした。

「出来ました。お喰りなさい」

直助は、魚の皿を運んで来る女中のうしろから、少し遠ざかってかの女に手をついた。

直助はかの女のために自ら食べ物を探し、調理している。湊の母親が食べ物食べてくれない息子にしたのと同じく、直助も食べ物を食べないかの女に自らの手で食事を作った。その食べ物魚である点も共通している。

川魚は、みな揃って小指ほどの大ききで可愛ゆかった。とつぷりと背から腹へ塗られた紺のぼかしの上に華奢な鱗の目が毛彫りのように刻まれて、銀色の腹にうす紅がさしていた。生れ立ての赤子の掌を寵愛せずにはいられないような、女の本能のプーチー（小さくて可愛い）なものに牽かるる母性愛的愛慾がかの女の青春を飛び越して、食慾に化してかの女を前へ押しやった。少しも肉感を逆立てない、品のいい肌質のこまかい滋味が、かの女の舌の偏執の扉を開いた。川海苔を細かく忍ばしてある。生醤油の焦げた匂いも錆びて凍々しかった。串の生竹も匂った。

かの女は直助が自身で調理した食事に対しては、食慾を感じている。これもまた、母が自ら握った鮎は食べることできた湊と重なる。では食べた後の反応はどうだろうか。

「……私、べつにこれおいしいとも何とも思はないわ……けだ……」  
かの女は何人からでも如何なる方法によっても、魂の孤立に影響

されるのを病的に怖れた。

「けれども、お礼はしたいわ。私、あなたのお母さんに、似合いそうな反物一反あげるわ。送ってあげなさいな」

直助は俯向いて考えていた。少し息を吐き出した。

「お話は難かしくてよく判りませんが、母へなら有難く頂戴いたします」

かの女は直助の母への贈り物という間接的な感謝の表現で「おいしい」という気持ちを伝えようとしているのだろう。そう考えれば、「何人からでも如何なる方法によっても、魂の孤立に影響されるのを病的に怖れ」、素直に「おいしい」と言えなかったことが分かる。湊が「おいしい」と言えなかったのと同じで直助に素直に感謝の意を表せないのである。

湊とかの女の共通点はそれだけではない。まず二人はともに旧家の出である。さらには、共に偏食であった幼少の湊とかの女の好んで食べた食べ物までもが同一であるのだ。「鮎」には湊について、

その子供は小さいときから甘いものを好まなかった。おやつにはせいぜい塩煎餅ぐらいを望んだ。

という描写がある。また

玉子と浅草海苔が、この子の一ばん性に合う喰べものだということが見出されたのだった。これなら子供には腹に重苦しいだけで、穢されざるものを感じた。

子供はまた、ときどき、切ない感情が、体のどこからか判らないで体一ぱいに詰まるのを感じる。そのときは、酸味のある柔いものなら何でも噛んだ。生梅や橘の実を挽いで来て噛んだ。

と書かれている。一方「川」には

まだ実の入らない果実、塩煎餅、浅草海苔、牛乳の含まぬキャンデー、——食品目は偏って行った。かの女は、人の眼に立たぬところで、河原柳の新枝の皮を剥いて、『自然』の素の肌のような白い木地を噛んだ。しみ出すほの青い汁の匂いは、かの女にそのときだけ人心地を恢復させた。

とかの女の食べられるものが偏るさまが描かれている。傍線部から分かるように、偏食である湊とかの女の食の好みは同一と言ってもよいだろう<sup>(25)</sup>。

これらの共通点から、「鯨」での母親と「川」での直助を重ね合わせられる存在だとすると、直助は男性でありながら、かの女の〈母〉として描かれているのではないだろうか。

「鯨」では幼少の湊が母と〈母〉を同一視していると述べた。ここでは母と〈母〉のどちらかが否定されるわけではなく、かといってこれまでの研究で述べられてきたような二つの母の完全なる一致があるわけでもない。以下は先にも引用した箇所だが、改めて傍線部に注目して考え直してみたい。

子供は、ふと、日頃、内しよで呼んでいるも一人の幻想のなかの母といま目の前に鯨を握っている母とが眼の感覚だけか頭の中でか、一致しかけ一重の姿に紛れている気がした。もつと、びったり、一致して欲しいが、あまり一致したら恐ろしい気もする。

傍線部から、湊があえて母と〈母〉の完全な一致を避けていることは明らかである。これまでの母、あるいは普段の母ではなく、自分のために鯨を握ってくれている今この瞬間の母こそが、湊にとっては〈母〉なのだ。生みの母のある一瞬に〈母〉の役割が現れており、その一瞬、一人の人物に二つの役割、生みの母と〈母〉が与えられていると考えられるのである。湊の母が自らの手で湊の食事を作るその瞬間に〈母〉になり得ているとすれば、直助もまた、自らかの女の食事を作るそのときに、持つて生まれた性別とは関わりなく〈母〉になっていると考えられる。「鯨」での湊と母、「川」でのかの女と直助は、湊と〈母〉、かの女と〈母〉という同様の構造で描かれていることが分かるのである。

これまでの家霊や川／河といった読解の軸を用いた読み方では見えにくかった二作品の共通点が、母や〈母〉に着目したことで見えてきた。特に「川」はこれまで母あるいは母性といったキーワードを用いて読まれることがなかったが、母／母性に着目し再読すると、〈母〉として機能する人物が登場していることを明らかにできた。むしろ血のつながりのある母よりも細やかに描写され、ストーリー展開において重要な人物は〈母〉であった。

先行研究がかの子の生前、または没後間もない頃の評価や着目点に沿って行われてきたことも分かったが、その評価や着目する軸をずらすこ



とで新たに発見できるものがあるのではないだろうか。ここでの考察結果からも分かるように、母だけでなく〈母〉もかの子の作品の重要な要素である。

かの子の文学の主要なテーマが「母／母性」であることは最初に述べた通りだが、作家自身の（体験の）投影としての母／母性が描かれているためだけにそのように評価されるのではない。小説として、より複雑に〈母〉が描かれ機能しているからこそ「母／母性」のテーマを背負う文学だと言えるのだ。

### 「母子叙情」研究動向

「鯨」「川」ともに、作中人物にはかの子が投影されているとの指摘があることはそれぞれの研究動向で述べた通りである。一方で、実在のかの子が作中人物にもっとも色濃く投影されているといわれるのは「母子叙情」(『文学界』一九三七年三月)だ。さらに、本稿で着目する「母／母性」のテーマが描かれている作品でもある。

「母子叙情」はこれまでも「母／母性」のテーマから研究されてきた。母／母性の特徴が重なる他の作品と比較されることもあるが、その際、作者であるかの子の母性を經由して論じられることが多い。作者の母性を踏まえ作品を読むことで、ある意味シンプルに読まれてきたのだ。しかし描かれた母あるいは〈母〉はそれほどシンプルに解釈できるものだろうか。「鯨」と「川」に描かれていた〈母〉の特徴が「母子叙情」ではさまざまに描かれている。

まずはこれまでどのように「母子叙情」が研究され、評価されてきたのかを整理し、考察の足掛かりとしたい。

かの子の作品の中でも、特に「母子叙情」は作者と作中人物の同一視がされやすい。すなわち、かの女はかの子、一郎は太郎をモデルにして、ヨーロッパ外遊の際の体験を書いたと考えられている。

作者と作中人物の関連に言及する同時代評<sup>25)</sup>を次に引用する。かの子とかの女が同一だとまでは言いきれないものの、「當の倅」「矛盾が無さすぎる」と述べていることからかの女はかの子をモデルにしていると考えられていることが分かる。

岡本かの子氏の「母子叙情」といふ長い小説はまことに叙情の文章で、利發な子供を持つた親心のうれしさに溢れてゐる。かういふ小説は先づ當の倅に讀ませ、それから同じやうな境遇に居る母者人讀ませると効果があるだらう。

(中略)

こんな環境から生産される文學はどうしても詩だ。散文に書き綴るには矛盾が無さすぎる。しかもそこからこの尨大な小説が出来上つたのである。一に息子に對する愛情の力だ。これは非凡な情熱でもあり、豐饒な才能でもある。恐らくこの作者は、作品の中に書かれた「かの女」によく似た女人に違ひあるまい。

このように、かの子とその家族がモデルであろうことを汲み取りながらも「よく似た女人に違ひあるまい。」という言い方に留めている。モデルの件に関しては、かの女をかの子と切り離して読み解くのは難しいのかと思われるほど数多くの論文で言及がある。

かの子の他作品と比べ、「母子叙情」のみを独立させて論じた論は多く

ある。中野恵海氏<sup>(27)</sup>の論はその中でも早くに発表されたものだが、そこでは作中のかの女の言葉はかの子の言葉として理解されている。かの子やその周囲の人々がモデルになっていないことには異論はない。しかしながらかの女がかの子である前提で作品を読むと、作品に描かれた本来のかの女の姿が見えにくくなってしまいうのも確かであろう。「母子叙情」からかの女を見るのではなく、他作品比較の中でかの女に着目する、またかの女と一郎という母子関係、かの女と一郎と規矩男という三者の關係に着目すると、かの子ではない、作中人物としてのかの女の性質が浮き彫りになる。

規矩男については岡村淑美氏<sup>(28)</sup>が細やかに述べている。これまでなされなかった時間的・空間的視点から考察されており注目に値する。ではこれまでの規矩男に関する指摘はというと、一郎と規矩男がどれだけ重ね合わせられる存在かという点に論が集中していた。高良留美子氏<sup>(29)</sup>は

しかしかの女の行為は、「むすこの存在の仲介によつて発展した事情において」などというまわりくどい説明より、端的に規矩男が一郎の分身であり、双生児の兄弟であると考えた方が分かりやすい。

と述べている。岡村氏は差異を指摘するものの、同一と考えるのがいわゆる定説となっている。二人が同一であるならば、かの女と一郎という母子関係はかの女と規矩男の關係と同一であるとも言えるだろう。かの女と規矩男は実の母と息子ではないので、かの女は〈母〉、規矩男はその子ということになる。かの女と規矩男が〈母〉と子であることは後に検証する。

「母子叙情」は何度となく「母／母性」というテーマで論じられてきた。しかしそこにはかの子と太郎という実在の母子の姿が重ねられ、作中人物であるかの女と一郎、描かれた母子の考察がほとんどされてこなかった。本稿では、かの子が自分のことを描いたのかという問題には触れずに、作品のみ見ると何が描かれているかを明らかにする。あえて実在の作者と作品を切り離すことで、これまで死角となっていた、描かれた〈母〉が浮かび上がるのである。

#### 母から〈母〉へ

では、「鯨」と「川」と同様に、「母子叙情」も本文の考察を行ってきたい。作者・かの子について触れずとも、作品と作品の共通する要素から「母子叙情」の「母／母性」というテーマを〈母〉／〈母性〉から読み直すことができると思う。

ここまでは、共に〈母〉の子にあたる「鯨」の湊と「川」のかの女が偏食で酸味のあるものや未熟の果実を好むことを述べたが、「母子叙情」では規矩男が同様の人物として描かれている。

「僕の積極性は、母の育て方で三分の一はマイナスにされてますから」

かの女はこの青年のこれだけ整った肉体の生理上にも、何か偏つたものがあるのではないかと考えてみた。これだけつき合った間に気がついただけでも、飯の菜、菓子の好みにも種類があった。酸味のある果物は喘ぐように貪り喰った。道端に実っている青梅は、妊婦のように見逃がさず挽いで噛んだ。

「喰ものでも変っているのね、あなたは」

「酸っぱいものだけが、僕のマイナスの部分に刺戟するロマンチックな味です」

「鮎」の湊や「川」のかの女のように極端ではないにしろ、規矩男に偏った食の好みがあることが明示されている。規矩男が好むものは湊やかの女と同じ酸味のある果実で、また湊やかの女と同じく嘔むという行為をしている。これについて宮内淳子氏は、「鮎」と「母子叙情」を比較し以下のように指摘する。「感情の強い子供が、その表現方法を知らずに苦しんでいる。規矩男も同じ状態にあり、そこには「酸味のある果物を噛んでようやくこらえる切なさ」が描かれている。

子供はまた、ときどき、切ない感情が、体のどこからか判らないで体一ぱいに詰まるのを感じる。そのときは、酸味のある柔いものなら何でも噛んだ。生梅や橘の実を挽いで来て噛んだ。

湊は「切ない感情」が「体一ぱいに詰まり氾濫するのを、酸味のあるものを嘔むことでこらえているのである。宮内氏の述べるとおり湊と規矩男が同じ状態であるならば、規矩男が言った「僕のマイナスの部分」、「積極性」の「マイナス」というのは「切ない感情」であると考えられる。

この点からも規矩男が湊やかの女と同じ〈母〉の子と考えられるが、何より「母子叙情」のかの女、つまり〈母〉が血縁関係のない規矩男を自分の子のように思っている。かの女が規矩男を初めて家に招いたとき

には

——何という静かな単純な気持——そこには逢わない前のややこしい面倒な気持は微塵も浮んで来なかった。一人の伶俐な意志を持つ青年と、年上の情感を美しく湛えた知識婦人と——対談のうちに婦人は時々母性型となり、青年はいくらかその婦人のむす子型となり——心たのしいあたたかな春の夜。そうした夜が三四日おきに三度続くうち、かの女は銀座で規矩男のあとをつけた理由を規矩男に知らせ、また次のような規矩男の身の上をも聞き知った。

と、かの女と規矩男が母と息子のような様子で過ごしている。かの女が「銀座で規矩男のあとをつけた理由」は規矩男の容姿がかの女の息子・一郎に似ていたため、

切ない自分の「母子情」を仲介にして自分に近づく運命を持ち、そして自分の心をこれほど捉え、これ程自分に馴れ甘える青年を、自分は何処までも引き寄せて愛撫し続けてやり度い心が、胸の底からぐつとこみ上げて来るのを感じた。

とかの女の心情が描かれている。だが、容姿が似ているというだけでかの女には規矩男が息子のように思われるわけではない。改めてよく見ればそれほど一郎と似ていないと気づいてからもかの女は規矩男を息子のよう思っているのである。かの女と、かの女が一郎の分身と見て接する規矩男が〈母〉と子の関係にあるのだ。

「鯨」と「母子叙情」を比較すると、「鯨」では湊が自分の生みの母の中に〈母〉を見出しているが、「母子叙情」ではかの女が規矩男を自分の生んだ子と同一視することで自ら〈母〉になつてゐる。〈母〉と子のどちらが認識して作中に〈母〉が登場するのかという点では差異があるが、それは〈母〉の描かれ方のバリエーションとも言えるのではないか。「鯨」と「川」に描かれていた〈母〉あるいは子の要素が「母子叙情」にも描かれている。

†

ここまで人物の配置とその関係について考察を行つてきた。しかしながら本文の内容を丁寧に読み、人物と人物の「距離」や恋愛感情に着目することで他の作品との重なりも見えてくる。「花は勁し」(『文芸春秋』一九三七年六月)、「金魚撩乱」(『中央公論』一九三七年十月)、「やがて五月に」(『文芸』一九三八年三月)、「老妓抄」(『中央公論』一九三八年十一月)など、かの子の代表作の多くに〈母〉や〈母性〉が描かれているのである。一見して分かる母から、作品を跨いでこそ見えてくる〈母〉へと焦点を移すことで、岡本かの子の作品の新たな側面が見えるようになるだろう。

## 注

- (1) 田中保隆「岡本かの子《女流作家であることの意味と限界》」(『国文学解釈と鑑賞』一九六二年九月)
- (2) 昭和十年十月二十四日(『岡本かの子全集』ちくま文庫、初版)
- (3) 勝又浩「岡本かの子のいのち」(『日本文学誌要』一九六五年十月)
- (4) 松本智子「岡本かの子——自己愛からの出発——」(『国文目白』一九八〇年二月)
- (5) 宮内淳子「岡本かの子 無常の海へ」(武蔵野書房、一九九四年十月)、高良留美子「岡本かの子 いのちの回帰」(翰林書房、二〇〇四年十一月)、漆田和代「渾沌未分」(岡本かの子)を読む(江種満子・漆田和代編『女が読む日本近代文学』新曜社、一九九二年三月)など。
- (6) 「家霊」という言葉——岡本かの子『家霊』をめぐって——(『日本語文化研究』二〇〇五年七月)
- (7) 「岡本かの子の『鯨』を読む」(『小説家になる! 2』メタログ、二〇〇一年一月)
- (8) 注(3)に同じ
- (9) 「餓鬼の饗宴——岡本かの子の作品について——」(『静思』一九四一年七月)
- (10) 「岡本かの子『家霊』——くめ子と〈仕事〉」(『日本女子大学大学院文学研究科紀要』二〇〇八年三月)
- (11) 「文學の嘘について——文藝時評——」(『文藝春秋』一九三九年二月)
- (12) 「岡本かの子「鯨」論 鯨屋をめぐる二つの物語——湊の語り、ともよの独白」(『学芸国語国文学』二〇〇六年三月)
- (13) 「岡本かの子『鯨』——ともよの〈孤独感〉——」(『国文目白』二〇一〇年三月)

- (14) 注(9)の杉森氏の先行研究でもそれが述べられている。
- (15) 本文の引用は『岡本かの子全集』(ちくま文庫、初版)による。
- (16) 注(9)に同じ
- (17) 「鯨」——「時」を超える母の鯨——(『岡本かの子 短歌と小説——我と没我と——』おうふう、二〇一二年三月)
- (18) 注(17)に同じ
- (19) 『泳ぐ魚』を中心に——『鯨』——(『岡本かの子 無常の海へ』武蔵野書房、一九九四年十月)
- (20) 注(9)に同じ
- (21) 「川の妖精」(初出は『文学界』(一九四〇年五月)、本稿では熊坂敦子編『岡本かの子の世界』(冬樹社、一九七六年十一月)を参照)など。
- (22) 漆田和代氏が「渾沌未分」(岡本かの子)を読む(『女が読む日本近代文学』一九九二年三月)で述べる通りである。これは川/河というキーワードに限定されることなく、次章で扱う「老妓抄」が「男を飼う小説、若い男のいのちを吸う小説、強い生命が弱い生命を翻弄する小説として読まれ」てきたとも指摘する。
- (23) 「近代日本文学における「客体」化の意味」(『茨城大学人文学部紀要(人文科学論集)』一九九八年三月)
- (24) 「河性の女・岡本かの子I——「川」を中心に」(『川・文学・風景』大東出版社、二〇〇二年十一月)
- (25) 宮内氏(前出論文と「かの女の時間——『母子叙情』——」共に『岡本かの子 無常の海へ』(武蔵野書房、一九九四年十月))は湊が酸味のあるものを嗜んだ箇所を引用の際に、本稿でも引用した「川」と共通する部分を引いている。「母子叙情」の規矩男が酸味のある果物を好むことについても同時に指

摘している。岡村淑美氏も「岡本かの子研究「母子叙情」論(規矩男)の存在」(『昭和女子大学大学院日本文学紀要』二〇〇一年三月)で「鯨」と「母子叙情」に関して同様の指摘をしている。

- (26) 新田潤・本庄陸男・荒木巍「作家の立場の差」(『中外商業新報』一九三七年三月五日)

- (27) 「母子叙情小論」(『相愛女子大学相愛女子短期大学研究論集』一九五八年十一月)

- (28) 「岡本かの子研究「母子叙情」論(規矩男)の存在」(『昭和女子大学大学院日本文学紀要』二〇〇一年三月)

- (29) 「母性の光と闇——『母子叙情』をめぐる——」(『岡本かの子 いのちの回帰』翰林書房、二〇〇四年十一月)

- (30) 「かの女の時間——『母子叙情』——」(『岡本かの子 無常の海へ』武蔵野書房、一九九四年十月)